教育改善プロジェクト報告

教養英語カリキュラムと TOEIC-IP 受験の効果的な接続に関する検討

山岸倫子, 水野真理子

令和 4 年度より開始した英語新カリキュラムにおいて、TOEIC 受験対策を主眼とした「基盤英語」科目が導入された。この新科目と、令和 3 年度より開始された、1 年次生の TOEIC-IP 一斉受験や、ALC NetAcademy NEXT の導入をどのように効果的に組み合わせていくかについての検討を行い、令和 4 年度から実施した。その結果、令和 4 年度前期において、ALC NetAcademy NEXT の利用状況に大幅な改善が見られた。

１．はじめに

令和 4 年度に開始した教養英語新カリキュラムにおける基盤英語 I・II は、TOEIC 受験に資する英語学習や e-learning による自律的な学修の促進を行うことを主眼としている。一方で、令和 3 年度より、全新入生に年 2 回の TOEIC-IP 受験が課されることになったこと、そして ALC NetAcademy NEXT が導入されたことにより、学生の TOEIC への興味関心は高まっているものと思われる。本報告では、新カリキュラム、TOEIC-IP 受験、ALC NetAcademy NEXT という要素を効果的に組み合わせる方法を模索した過程を報告する。

２．教養英語カリキュラムにおける ALC NetAcademy NEXT

富山大学では、令和２年度末に ALC NetAcademy NEXT が導入され、教養教育英語でも、それを活用する方法を模索することとなった。本格導入は令和４年度の新カリキュラムからとしていたが、試験的に、令和３年度より、英語リテラシー科目において導入を開始した。令和 3 年度前期には、担当教員全員に、ALC NetAcademy NEXT の学生への周知や、取り組みを促す声かけを依頼するにとどまったが、後期には英語リテラシーII の成績の 10%に ALC NetAcademy NEXT の取組みを反映することとした [1]。このような試験的な実施期間を経ることで、教員の間で ALC NetAcademy NEXT への理解が徐々に深まっていったと考えられるが、それでも、一部のクラスで混乱が生じるなどがあり、新カリキュラムを始動するためには、より理解の徹底を促進する必要があった。

令和 4 年度の新カリキュラムでは、TOEIC 学習に特化した「基盤英語」という科目を設けることと

なっていた。したがって、ALC NetAcademy NEXT を授業において活用する可能性とその有効性はよりいっそう高まっていたため、学生を ALC NetAcademy NEXT での学習になじませることには、これまで以上の意義があった。また、引き続き、成績の 10%に ALC NetAcademy NEXT の活動を反映することになっていたため、教員側の理解の促進も重要事項であった。これらのことを受け、新カリキュラムを滞りなく開始するために、令和 3 年度末に、Moodle 上に教員用の ALC NetAcademy NEXT 情報共有コース（2022_情報共有_ALC/NetAcademy/NEXT_教養教育）や、学生のサポート窓口コース（2022_サポート_アルクネットアカデミーサポート窓口_1 年生対象）を設置した。しかし、こうした理解促進の試みを進める一方で、学期が開始する 4 月の時点で、英語担当教員の一部が、学生がすでに ALC NetAcademy NEXT の使用方法や利用推奨方法を大学から指導されている（つまり、教員がすべきことは、最終成績の 10%に ALC NetAcademy NEXT の活動状況を反映させることのみである）という誤った認識を持っているということが判明した。そのため急遽、システムの紹介や、利用推奨方法をアナウンスするための動画 [2] を作成し、第 1 回の授業において、動画を学生に見せることで、担当教員がスムーズにシステムの紹介を行えるようにした。さらに、学期開始と前後して、国際教育部門長より担当教員へ、上記の情報の周知を徹底して行った。

３．ALC NetAcademy NEXT の利用状況

上記の通り、外国語部会英語分科会教養英語カリキュラム検討 WG および国際教育部門 [3] は、学生および教員が ALC NetAcademy NEXT への理解を深めることができるよう試行錯誤してきた。それでは次に、こうした取り組みが、学生の実際の利用状況にどのように反映されているかを見てみる（表１）。

まず、ALC NetAcademy NEXT が導入された直後の令和 3 年度前期末の利用状況であるが、前期中に少しでも取り組みを行った学生は全体の 29%にとどまった。また、取り組みを行った学生の進捗ポイント平均 [4] は 33.6 であった。これは、担当教員への依頼内容が、利用を促す声掛けにとどまったことが原因であると考えられる。

次に、令和 3 年度後期の利用状況であるが、少しでも取り組みを行った学生は全体の 56%となり、取り組みを行った学生の進捗ポイント平均は 43.7 と、前期に比べると改善が見られた。これは、英語リテラシーII の成績の 10%に ALC NetAcademy NEXT の活動を含めたためであると考えられる。

最後に、令和 4 年度前期の利用状況は、少しでも取り組みを行った学生の割合が 88%、取り組みを行った学生の進捗ポイント平均が 47.1 となった。また、取り組みを行った学生の進捗ポイント平均は、前年度後期に比べると 4 ポイント弱の伸びしか得られなかったが、取り組みを行った学生数が飛躍的に増え、その多くが 1 つのコースの約半分の分量の教材に取り組んだことを考えると、大幅な改善と言えるだろう。この背景には、や

表１．ALC NetAcademy NEXT 利用状況の変化

	取り組みを行った学生の割合	取組みを行った学生の進捗ポイント
令和3年度前期	29%	33.6
令和3年度後期	56%	43.7
令和4年度前期	88%	47.1

はり、新カリキュラムが導入され、新科目「基盤英語」が開始したことで、カリキュラムと ALC NetAcademy NEXT の親和性が高まったことが理由としてあるのではないかと考えられる。

４．TOEIC-IP スコアの伝達について

令和 3 年度に TOEIC-IP が初めて実施された際、受験した学生及び、多くの教員を擁する英語分科会および非常勤講師のグループに対し、スコアデータ等に関する膨大且つ機密度の高い情報を、どのように伝達すればよいかが課題となった。ところが、令和 4 年度において、スコア通知の詳細なスケジュールを教養教育支援室に確認したところ、学生については、4 月下旬に各学部を通して通知作業が行われるため、前年度に行った Moodle でのスコア速報値の通知作業は行わなくてもよいことが判明した。一方、担当教員へのスコア通知は、行うべき作業として残った。そのため、教養教育支援室に協力を仰ぎ、学生と教員を紐づけしたデータを作成してもらい、国際教育部門では、そのデータを「基盤英語 I」担当の各教員宛に個別にメールで通知する作業を行うこととなった。学期の初期の段階で、担当する学生の TOEIC-IP スコアが分かることについては、担当教員から「授業序盤の時期にスコアが分かるのは（授業の運営上）大変ありがたい」等の好意的なフィードバックが寄せられたため、後期についても、8 月下旬の時点で同様の作業を行い、「基盤英語 II」担当教員にデータを送付した。

５．今後の検討事項

まず、ALC NetAcademy NEXT の利用率についてであるが、令和 4 年度後期の状況に注目していきたい。と言うのは「基盤英語 II」においては、前期の「基盤英語 I」と異なり、ALC NetAcademy NEXT の活動を成績には含めず、その代わり、1 月に受験する TOEIC-IP の成績を 30%に換算して最終成績に反映させることになっている。そのため、学生にとっては、ALC NetAcademy NEXT に取り組む直接的なインセンティブがない状態である。そのような中で、1 月の TOEIC-IP 受験を見据えて、学生がどのように ALC NetAcademy NEXT を活用するかは注視していく必要があると考える。

また、「基盤英語 II」を再履修する 2 年次以上の学生は、1 月の TOEIC-IP の受験対象となっていないため、成績の 30%分となる TOEIC-IP スコアがない状況となる。こういった学生に対し、どのような代替措置を設けるかも、急ぎ検討が必要である。

最後に、「基盤英語 I」「基盤英語 II」を履修した学生を対象に、1 月の TOEIC-IP 成績優秀者への表彰など、学生の学習意欲を高める工夫についてもさらに検討している。現在、他大学における同様の取組みを調査し、英語学習に対する学生のモチベーション上昇につながるような表彰制度の構築を模索しているところである。

教養英語の新カリキュラムはまだ始まったばかりであるため、このカリキュラムがどのように学生の TOEIC スコアアップにつながっているかを検証することは難しい。引き続き両者の関係性を追い、カリキュラムの改善につなげていきたいと考えている。

註

1. 令和 3 年度の取組みについては次を参照。「TOEIC® Listening & Reading Test の導入と e-learning 学修の活用」. 山岸倫子他.『富山大学教養教育院紀要』3 号. pp. 89-94.
2. 「【富山大学】TOEIC スコアアップに向けて～ALC NetAcademy NEXT の紹介」. https://www.youtube.com/watch?v=rbJUxfipGco
3. 令和 4 年度からの新カリキュラム構築（令和 3 年度末まで）は、外国語部会英語分科会教養英語カリキュラム検討 WG が主体となり行っていた。令和 4 年度からの新カリキュラム運営については教養教育院国際教育部門が中心となり行っている。
4. ALC NetAcademy NEXT の TOEIC 対策コースは 3 種類あるが（500 点、600 点、730 点突破コース）、取り組み状況に応じて、各コースに「全体進捗率」としてパーセントが表示される仕組みになっており、例えば 1 つのコースを修了すると、そのコースの「全体進捗率」が 100%と表示される。学生は複数のコースに同時に取り組むことができるため、各コースでの進捗状況のデータから各コースでの平均値を導き出すより、3 コース併せた 300%を 300 ポイントとし、そのうちの何ポイント獲得したかを計算する方が、より正確に学生の ALC NetAcademy NEXT への取り組み状況を把握できると考えた。よって、「取り組みを行った学生の進捗ポイント」は 300 が最大値となり、令和 4 年度前期の「47.1」という数字は、1 コースの半分程度の分量にあたると考えられる。この分量は、2 で言及したシステム紹介動画内で、取り組みの目安として提示した「1 年間で 1 コース修了」の約半分であることから、多くの学生が、こちらが期待していた分量と同等量の取組みを行ったことが分かる。

山岸倫子
　教養教育院
水野真理子
　教養教育院